
 学 会 記 事

第25回糖尿病談話会

日 時 平成8年4月6日(土)
午後2時30分より
場 所 万代シルバーホテル

I. 一般演題

1) 抗 GAD 抗体の臨床的有用性

鴨井 久司・高木 正人 (長岡赤十字病院
内科)
村山 正栄 (同 RI室)

I型糖尿病の診断用に開発された抗 GAD 抗体測定
の有用性を検討した。尿中 CPR 排泄量が 20 $\mu\text{g}/\text{日}$ 以下
ないし血中 CPR 濃度がグルカゴン負荷後 1 ng/ml
以下を IDDM とし、耐糖能異常が発見されて12カ月以
内にインスリンを要した場合を急性発症型、それ以上を
経てインスリンを要した場合を緩徐発症型とした。血中
GAD 抗体価が 5 U/ml 以上を陽性とする、加療中
の IDDM 31/57 名 (54%)、急性型は 19/28 名 (68%)、
緩徐型は 12/29 名 (42%) が陽性を示した。女性が男性
の2倍で、発症後の測定期間が短い症例に陽性者が多く、
年齢差は明らかでなかった。NIDDM 患者49名中13名
(27%) が陽性で、男女差は明らかでなかったが、グレイ
ブス病、悪性貧血、慢性関節リウマチ、インターフェ
ロン注射後など自己免疫疾患合併例に認められ、1例で
は測定後2年目に IDDM に移行した。抗 GAD 抗体
の著高例では ICA が陽性を示した。抗 GAD 抗体測
定は I 型の診断に有用と思われる。

2) 抗 GAD 抗体測定の経験

佐藤 幸示・筒井 一哉 (県立がんセンター
新潟病院内科)
谷 良弘・殿内 芳成 (同 RI室)

抗 GAD 抗体を測定し、若干の成績を得た。対象は
当院の糖尿病患者計 249 名で、インスリン治療患者81名、
経口血糖降下剤または食事のみの 165 名、膝切などの 3
名。4 単位以上を陽性し、13名が陽性。インスリン治療
が多く10名で、その他は 3 名。インスリン (I) 治療の

男 7.1, 女 17.9, 合せて 12.3%。経口剤、食事療法で
は男のみ 3 例、3%で、男女合せると、1.8%。尿中 C-
ペプチド 1 日 20 μg 以下の症例は I 治療患者で 14 例あ
り、3 例が陽性で、21.4%。ICA は I 治療患者のみで
57 名中 5 名陽性で、8.8%。両方に陽性を示した患者は
なし。I 抗体は I 治療の患者で 10 名、17.5% で陽性。
I 自己抗体を持っている糖尿病患者がいるとは言えず。
抗甲状腺抗体、抗核抗体も抗 GAD 抗体と相関は無かつ
た。今後、症例を増やし、経過観察をし、抗 GAD 抗
体の臨床的な意義を検討したい。

3) ミトコンドリア遺伝子異常を有する糖尿病
姉妹例

金子 兼三 (長岡赤十字病院
内科)

家族歴) 母、母方叔母ならびに祖母が DM で死亡、
父が最近 NIDDM 発症。病歴) 症例 ① 姉、33 歳。小
柄で痩せ型。昭 50 (13 歳) IDDM 発症し、インスリン
療法開始したが、血糖コントロール不良。昭 61 年難聴指
摘。昭 61. 8 当院転院。易疲労、四肢筋発達不良、転倒
し易いなどの症状あり。神経障害 (++)。以後中間型
+速効型インスリン朝夕皮下注により、HbA1c 7%
前後 (冬期 8% 台)。平 1. 6 並びに平 6. 4 麻痺性腸閉
塞併発。平 7. 1 感音性難聴増悪し、mtDNA 3243 変異:
17% 発見。症例 ② 妹、25 歳。小柄であるが肥満傾向。
昭 56. 4 (10.5 歳) 感冒を契機に NIDDM 発見。食事、
運動療法でコントロールされていたが、昭 60 よりイン
スリン療法 (中間型+速効型朝皮下注) 開始。血糖コント
ロール不良であったが、平 5. 9 結婚後 HbA1c 6~7
% 台。平 6. 7 両側多発性卵巣のう腫手術。平 7. 9 mtDNA
3243 変異: 21% 発見。難聴 (-)。平 7. 12 体外受精で
妊娠し、CSII 開始。結語) 変異遺伝子のヘテロプラス
ミーにより DM の病型、臨床像の差異が生じたと思わ
れる。

4) 頸動脈エコーによる動脈硬化の実態調査に
ついて

湯田真紀子 (舟江病院)

舟江病院で管理している糖尿病患者 358 名と高血圧等
21 名、計 379 名について頸動脈エコーを実施した。年令、
男女、DM ランク別に IMC の厚さ、プラークの有無
について調べた。